

保育者の子ども理解を促す造形的イメージワークの有用性と今後の課題

The Usefulness of Figurative Image Work to Promote the Understanding of Children for Childcare Professionals and the Challenges that Lie Ahead

林 牧子¹, 高橋敏之²

Makiko Hayashi¹, Toshiyuki Takahashi²

[要旨] 本論は、コラージュとフィンガーペインティングを主な活動内容とする造形的イメージワークが、子ども理解を促す機能を有する可能性を示唆し、本ワークを保育者に対するリカレント教育として実施する意義と課題について論じることを目的としている。コラージュとフィンガーペインティングは、共に芸術表現として発生し、芸術療法としても応用されている特徴を持つ造形表現の技法であるが、教育現場においても自我理解を深化させるなどの機能と効果が確認されている。そこでこれらの技法を組み合わせ、個人と集団で連続的に実施する造形的イメージワークとして構成した。参加者は、制作過程で生じる心的変容の客観化によって感情状態に対する気づきを得ていることが明らかになっているが、今後は、それらの感情経験が子ども理解を促す過程を明確にし、造形的イメージワークの有用性を提示することが課題である。

[Abstract] This paper suggests the possibility that figurative image work, with the primary activities being collage and finger painting, has the function of promoting the understanding of children and its objective is to discuss the significance and challenges of practicing this work as recurrent education for childcare professionals. Collage and finger painting have together emerged as artistic expressions and are formative expression techniques with certain characteristics that are being applied as art therapy. In addition, their function and effects of deepening the understanding of oneself and others have been confirmed in the education field. Hence, these techniques were combined to compose figurative image work that was continuously implemented among individuals and groups. As a result, it became evident that the participants gained awareness of emotional states through the objectification of the psychological transformations that occurred during the production process. However, going forward a challenge will be clarifying the process by which these emotional experiences promote the understanding of children and showing the usefulness of figurative image work.

[キーワード] 保育者の資質、子ども理解、造形的イメージワーク、自我理解、リカレント教育

[Key words] Qualities of childcare professionals, Understanding of children, Figurative image work, Understanding of oneself and others, Recurrent education

[所 属] ¹愛知教育大学 (Aichi University of Education), ²岡山大学 (Okayama University)

[受理日] 2015年12月12日

1 保育者のリカレント教育としての造形的イメージワーク

本論は、造形表現の技法の一つであるコラージュとフィンガーペインティングの教育的意義に関する研究と現在の動向を整理し、各技法を含む造形的イメージワークを、保育者におけるリカレント教育の一方法として使用するための課題と方向性を論考するものである。

保育者の専門性の観点から、子ども理解^{★1}と自我理解は重要視されており、保育者は、「幼児とかかわっているときの自分自身の在り方やかわり方に、少しでも気づいていく」¹ことと、「職員の間観・子ども観などの総体的なものとして現れる人間性の自覚」²が不可欠とされている。しかし、これらの学びの具体化はされておらず(上条, 2014)³、保育経験への依存や、理論的な学びを反復せざるを得ない現状がある。

このような背景を踏まえ、第一著者は、これまで、保

育者を目指す大学生を対象として、造形的イメージワーク(個人コラージュ・集団コラージュ・個人フィンガーペインティング・集団フィンガーペインティング・集団カッティングの5種類で構成された一連の活動であり、この順番で行う)を実施してきた。本ワークは、1975年に樋口が開発した「ファンタジーグループ」という、集団造形表現活動⁴を参考にして再構成したものであり、造形表現を行いながら、子どもの遊びや感情を追体験し、子ども理解と共に、自我理解を促すことを目的とする。

これまでの研究より、造形的イメージワークを行うことで、心的変容の過程に参加者自身が気づき、自我理解が深化することが示唆された⁵⁻⁷。また、子どもの気持ちに対する理解の深まりや、子どもの活動に声を掛ける際の注意点など、保育者の専門性と関わる内容についての気づきも得られている。保育者の資質の向上に関して

は、保育の技術や方法のような、即座に保育内で応用可能な力の育成が重要視されやすい。しかし、保育者自身が人間性を自覚した上で保育に臨み、子ども理解を深めることが、資質の向上を促すものと期待される。造形的イメージワークを行う中で、子ども時代の遊びを想起しつつ、実感を伴った上で、子どもの感情の理解をすることが必要だと考えられる。

そこで本論では、保育者のリカレント教育としての造形的イメージワークの有用性について検討する。まず、造形的イメージワークの構成要素であり、様々な造形表現の中でも、美術教育の分野のみならず芸術療法の分野においても「言語以前に起こった未解消の感情体験」⁸を表出する手段として用いられてきた、コラージュとフィンガーペインティングに関する研究について俯瞰する。次に、それらの技法を用い、教師やカウンセラーなどの対人援助職の教育及び自己研修を目的として構成された、ファンタジーグループについて概観する。そして、これらの技法が他理解の深まりに及ぼす機能と可能性について述べると同時に、それらの技法を用いた造形的イメージワークを提案し、保育者のリカレント教育として実施するための方向性を提示する。

2 コラージュの実践と機能

2-1 心理臨床分野におけるコラージュの実践

コラージュは、芸術技法の一つとして発展してきたと同時に、芸術療法の一つとしての位置付けもある。そのため、カウンセリングと同時にコラージュを実施したり、言語コミュニケーションが難しい患者に対して、非言語的な治療技法として行ったりするなど、コラージュは、心理臨床の現場で使用される機会が多い。

コラージュが心理療法の一つとして位置付いたのは、1989年であった⁹。中井（1993）は、コラージュの治療力について、「統一対分散」という視点を提唱している。人間の思考、感情、行動などは、「まとまろう」とする統一方向性と「ちらばろう」とする分散的方向性を有しているが、考えをまとめるためには両方の方向性を必要とする。そして、「精神の健康あるいは精神の存立自体の可能性は、その中間にあり、この二つの方向性の、揺らぎを伴った動的平衡」にあることが必要で、それによって「統一と分散との統合、すなわち展開（発展）」が可能になると述べている。その上で、コラージュの制作過程は、「統一作用と展開作用」が交互もしくは同時に働き、無秩序な思考や感情や行動などにまとまりを与え、固執や萎縮を分散させる機能を持つものであるが、

その機能自体がコラージュの持つ治療力であるとしている。さらに、雑誌の切抜きを貼り始めてから貼り終えた後に、「治療者が冒険の話を書くような姿勢を示す」ことがコラージュ療法を完成させるのであり、そのためには、コラージュ作品を認め、受容する存在が必要であるという¹⁰。つまり、コラージュ療法の治療的効果は、コラージュを実施するだけでなく、完成した作品に対する共感的姿勢が伴うことで、より高くなることを示唆している。

また、中村（1999）は、コラージュの制作過程について、「各作業段階を経過していくことで、内界に喚起したイメージや自己表現内容を自分自身で確認や修正をする体験過程を持つ。このことはコラージュをするそのこと自体が治療的な営みであることを示唆している」と述べている¹¹。しかし、コラージュ療法においては、コラージュを複数回行うことによる治療効果を示すことが目的となるため、制作者が自分の作品を客観視し言語化することで、コラージュの体験に伴う心的変容と体験の意義を示すことを目的とした研究は少ない。

2-2 教育分野におけるコラージュの実践

杉浦ら（1997）は、大学生を対象として、集団コラージュの実施による効果を実験により検証しているが、集団コラージュの経験が、心身のストレスの解消と、対人関係における積極性や自己拡大を促し、さらに、イメージを媒介として自己理解や他者理解を行っていることを示した¹²。また、徳永（1999）は、小学生に対する「連想コラージュ法」の授業実践を報告している。連想コラージュ法とは、集団で一つのコラージュを完成させるのであるが、一人ずつ順番に、前に貼った人の切抜きから連想される切抜きを次の人が貼っていくものである。その経験が、自分と友達とは感じ方に違いがあることに対する気付きに繋がるとしている¹³。

コラージュの制作を主とした、美術教育における造形活動の教育効果として、上西（2007）は、「より広範な教育の目標である人間の自己同一性（アイデンティティ）の確立に繋がること」を示し、「美術制作には、制作そのものが従来の美術教育の枠を超えた自己理解という教育効果を期待できる」としている¹⁴。また、山梨（2012）は、小学生と中学生を対象としてコラージュの制作を行い、「心の変化を実感する」こと、作品の批評を通して「自己や他者を再発見する」ことなどを目的とした実践を行った。そこで、コラージュが、小中学生にとって「自分の心の変化を体感できるツールとして有効」であると示唆している¹⁵。以上の先行研究より、コラージュの制

作が自他理解に及ぼす教育効果についての示唆が得られている。したがって、コラージュの制作は、保育者の自他理解を促し、自身の価値観や人間観の自覚に繋がる技法としての可能性を有するものと考えられる。

2-3 コラージュの制作がもたらす自他理解の過程と保育者のリカレント教育への応用の可能性

心理臨床分野及び教育分野におけるコラージュの機能についての見解によると、コラージュの体験は、自他理解や自己の気持ちの変化及び、他者との感じ方の差異への気付きを促す契機となり得るものと考えられる。しかし、活動体験の前後において、心的変化が起こることは自明であり、その体験は、コラージュに限ったことではないであろう。コラージュを実施することで生起する感情経験やその過程そのものを分析することで、自他理解や自己の心的変化に影響を及ぼす、コラージュが持つ特有の要素を明らかにすることが求められる。

以上のような実態から、矢野（2010）は、コラージュの制作者が自身のコラージュについて語り、意味を創造する過程を分析し、「体験とシンボルの相互作用が意味を生み出し、その循環が次々と新しい意味を生み出す過程である」ということを示している¹⁶。また、上西（2013）は、コラージュの制作過程を言語化する際に想起される自分の情動などを意識化して、「私の過去、現在、未来に向き合うことが、自己理解に繋がると示唆している¹⁷。

コラージュは、芸術技法としても、芸術療法としても位置づいている表現方法である。美術界において超現実主義者と呼ばれる芸術家は、コラージュを自分の意識とは無関係な表現である、自動記述^{★2}の手法に基づいた造形表現の技法として捉えた。つまり、関連性のない切り抜きを適当に配置することにより偶然の表現が現れるが、それは美意識などの意識的な思考が関与しづらい、半ば無意識的なイメージの集合体である。この現象は、芸術表現としてのコラージュではなくても生起するものであろう。したがって今後は、保育者を対象としてコラージュを実施し、制作過程の言語化に伴う自他理解や心的変容の内容を明らかにすることで、コラージュの制作が保育の質の向上に及ぼす意義を追究することが課題である。

3 フィンガーペインティングの歴史的背景と実践

3-1 フィンガーペインティングの特徴と機能

人類が編み出した造形表現において、フィンガーペインティングは、最も原始的な手法とされているが、技法

としては、1930年にショウ（R. F. Shaw）によって取り入れられている。フィンガーペインティングは、言語表現に頼ることなく、自己表現を可能にする方法として、教育現場において利用された¹⁸。その後、1940年代頃から、児童心理学者によって、子どもに対する心理療法であるプレイセラピーの一環として、また査定補助として用いられるようになった。ショウ（1934）は、フィンガーペインティングの特徴を、「クレヨンや鉛筆で線を描くときの空虚感に比べると、指絵には拳や掌に得られる充実感とゆたかさがある¹⁹と述べている。また、石井・藤原（1961）は、フィンガーペインティングの特徴を、「クレヨン画のようにみちすじがはっきりしない」が、「子どもがその困難さに積極的に立ち向かっていく時（中略）こそ子ども達の自発性が引き出され」と捉え、保育園児に2名で行うクレヨン画とフィンガーペインティングをそれぞれ実施し、やりとりされた言葉を分析した。その結果、クレヨン画では、画題についての話題や描画の評価など、単純な誘いかけや意思表示による「フォーマルな形」で人間関係が成立しやすく、対してフィンガーペインティングでは、自分の描画行為に没入しやすいため、「個人的な、より深い表現になっていく」ことを示した²⁰。

類似の捉えとして、中井（1985）は、「硬いものほど知的防衛的となり、柔らかいものほど感情のあふれた、退行的、衝動的、満足許容的なものとなる。色鉛筆をひとつの極とすればフィンガーペインティングは他極であろう」としている²¹。さらに、岡田（2006）は、フィンガーペインティングは、「感覚運動的な表現特性からも、身体運動活動と表象、情動、言語、象徴性を有機的に統合していく²²と述べており、いずれも、指に絵の具をつけて描く行為が感覚的で情動的な機能を有することを示唆している。

以上の研究成果によって、線画とフィンガーペインティングが、それぞれ描画者に与える影響の差異が明確に示された。色鉛筆やペンやクレパスなどの画材には、先端があるため線を描きやすく、色も延ばしやすいので、想定した対象が比較的容易に描ける。一方、フィンガーペインティングは、指先もしくは掌に絵の具を取って描くため、微妙で繊細な表現は難しい。しかし、自身の手指から表現が生まれることによる驚きや感動、また、繊細さを追求し難い結果としての大胆さにより、爽快感や心的緊張の発散などを実感する²³。そして、筆やペンで描くよりも技術の巧拙が明確にならないため、描画の際の心理的緊張が少ない。つまり、フィンガーペインティングは、描画材と描画方法がもたらす自由度の高さが、

描画者自身の想像を超えた表現を生み出す可能性を持つ描画方法と言えよう。

3-2 触覚を伴う描画法としてのフィンガーペインティングが有する固有性

河合（1995）は、イメージやシンボルとは、表層意識と深い意識のレベルとの融合点に生じるという内容の記述をしているが²⁴、それは、イメージがフロイト（S. Freud）の提唱した「前意識」的なものであることを示す。前意識に上ったものは、意識化が可能な事象である。したがって、イメージの表出過程を追い、言語化などを通して客観的に捉え直すことで、自身も気付かなかった感情や情動を知り、自己理解へと繋がる可能性がある。

岡本（2005）は、フィンガーペインティングを通して得られる体験について、個人のパーソナリティ傾向の違いを視座に入れて検証している。その結果、広い視野を持ち、他者や環境に関心が高いパーソナリティの持ち主が、描画表現への没頭や自己への気付きを得やすいことを明らかにしている²⁵。自己の内的世界を意識化し、表出または表現することは、心理臨床の分野において重視されてきたが、フィンガーペインティングのように、手指にぬるぬるとした触覚の絵の具をつけて塗りたいという行為により、退行が促進した状態でイメージとして表現された描画には、自然と意識下に抑圧された様々な感情が投影されている²⁶。ラパポート（L. Rappaport, 2009）は、「アートは、イメージや創造的なプロセスを通して、無意識と意識を関与させる表現媒体」であり、「私たちは言葉に比べて、アート作成を通して気持ちを表現することには慣れていないので、無意識のプロセスは創造のなかに投影される傾向が」と述べている²⁷。

日高（2012）は、不登校生徒にコラージュやフィンガーペインティングを集団で行う芸術療法を行い、共同作業による人間関係の深まりについて言及している。具体的には、制作技法の自由度と創作意欲の上昇、さらに集団凝集性の高まりが見られており、言語的コミュニケーションに依存しない集団の在り方が、結果として言語的コミュニケーションの活性化と自己肯定感の上昇に繋がると示した²⁸。

フィンガーペインティングは、他の芸術療法と比較すると、完成作品に具体的なシンボルやイメージが現れにくい。そのため、作品を解釈することが難しく、心理療法として一定の基準を設けることは、難しい。フィンガーペインティングを経験することが、心的緊張をほぐし、浄化作用をもたらすことは、経験則として捉えられているが、制作者がどのような心的変容の過程を経ているの

かを具体的に分析した研究は、少ない。今後、フィンガーペインティングの制作に基づいた心的変容過程を分析し、その意義と機能を明らかにし、フィンガーペインティングの果たす役割を明らかにしていくことが必要である。

4 ファンタジーグループの概要と各ワークが有する機能

ファンタジーグループとは、描画を中心とした集団療法及び教育研修方法の一つである。ファンタジーグループの機能は、「個人が内面を見つめることを大切にしながら、グループであることによって、個と集団の関係を体験できる場」と位置付けられており²⁹、具体的には、集団フィンガーペインティングと、その作品を切って再構成するカッティング、そして個人による粘土遊びの3種のワークから成っている。

岡田（2000）によると、この3種の技法は、相補的な関係にある。つまり、「発散的であり、水とニカワの感触によって退行を起こしやすい」情動的なフィンガーペインティングと、「切ることが形を作ることであり、より意識的にならざるをえない」カッティングは、「退行し、無意識に浸り、そこから（中略）意識の状態へもどっていく」という体験をもたらす。また、粘土遊びもカッティングと同様、意識化の作業として必要であり、同時に「個人が自分の体験を咀嚼し、現実生活にもどれるほどに整理するため」に必要なものとして捉えられている³⁰。日高（2000）は、このような経験をするのが「心の中の良い意味での幼児性を復活させる」とし、個人の内面を中心に扱うことによるカウンセラートレーニングや、グループダイナミクスの体験学習としてリーダートレーニングにも有効であるとしている³¹。

また、集団で行うことについて岡田（2007）は、「作業を通してのグループ力動が働く」と述べている³²。林（2009）は、集団フィンガーペインティングにおいて、参加者による実施後の自由記述を分析しているが、そこで、描画領域を巡る心理的攻防や、自分の作品が上手く生かされたことへの感謝など、否定的な感情と肯定的な感情が混在すること、これらの感情が同一人物の中で同時に起こることなど、集団で一つのものを作る際には、様々な心的力動が生じることを示唆している³³。

一方、個人で行う粘土遊びについて、秋葉（2007）は「グループから個人へ、非日常から日常へと発ち帰っていく移行のためのプロセス」³⁴と位置付けている。ファンタジーグループにおいて、個人ワークである粘土遊びは、個人的な体験をより強く表出させるワークであるが、これは、粘土の持つ可塑性や、直接触れることによる身

体的要素が空想を刺激し、空想による創造活動を活発にする³⁵という働きとも関係している。しかし、粘土遊びは「あまり深層に入り込むことなく、イメージを具体的な形へと造りだし、意識化を促す」³⁶ことを重視しているため、粘土という素材を用いる意味に関しては詳細に触れられていない。しかし、集団フィンガーペインティングに見られたような、他者からの介入や侵略は少ないという点から、個人的な表出活動を保障する働きがある。

ファンタジーグループにおける全ワークは、「終わりの儀式」として、作品を火に入れて燃やすことで終了となるが、これは、作品に現れた様々な感情体験を「浄化」し「救済」するための作業である³⁷。したがって、ワークでの体験を消去するためのものではなく、新たな気付きやファンタジーを生み出すための区切りとしての働きを持つ。

5 ファンタジーグループの実際と造形的イメージワーク

5-1 ファンタジーグループの実践に基づく先行研究

ファンタジーグループの実践に関する研究は少なく、報告の多くは、体験の記述によるものである。樋口(1986)は、ファンタジーグループの具体的な機能について、攻撃性が言語化されにくいために「しこり」が残らないことと、それが絵によって自己表現として可視化されることが、参加者が満足感を覚えることに繋がると述べている³⁸。しかし、フィンガーペインティングから粘土遊びまでの全ファンタジーグループの体験が、参加者に与えている影響を客観的に捉えたものは、見当たらない。

守屋(2007)は、集団フィンガーペインティングで体験されることを客観的に捉えており、集団の心理的凝集性が高まるほど、個人的領域や余白が減少して描画の混ざり合いを見せ、使用する身体が、指のみならず手全体にまで広がりを見せるなどの違いが生じることを示している。しかし、混ざり合いの質によって、体験者の思いは異なると言う。集団を構成する者が、相互の表現を尊重しながら手を加えて完成させる作品と、互いが気楽に、また自由に塗りつぶし合った結果完成する作品と、互いに攻撃的な侵入と塗りつぶし合いをした結果完成した作品とでは、退行の程度や他のメンバーへの評価、ワークへの満足度などに差異が見られた³⁹。

以上のように、ファンタジーグループに関する研究は非常に少ないのが現状であるが、造形表現を手段としたワークの経験により、自我理解の深化や人間関係の捉えに対する変化が得られることが先行研究より示唆された。そこで、ファンタジーグループの特徴である、集団

でフィンガーペインティング作品を作り、その作品を裁断して再構成するという内容が、集団で泥遊びなどをしながら作ったものを皆で壊すという、子どもの遊びによく見られる現象と類似すると捉えることにより、ファンタジーグループの理念を保育者教育に援用し、保育者自身が子どもの心性について体験的に理解する方法として再構成したものが造形的イメージワークである。造形的イメージワークを保育者や保育者を目指す学生に実施することで、自らも気付かなかった自分自身や、自己に潜む子どもの心性の気付きが促され、子ども理解に繋がると考えられる。

5-2 造形的イメージワークにおける個人ワークと集団ワークの機能及び意義

造形的イメージワークは、ファンタジーグループをアレンジしたものであるが、ファンタジーグループの工程との相違点が二つある。一点目は、粘土遊びの代わりにコラージュを採用した点、二点目はコラージュとフィンガーペインティングにそれぞれ個人ワークと集団ワークを組み入れている点である。

まず、粘土遊びの代替としてコラージュを採用した理由は、治療的及び教育的効果も明らかにされており、また、既成のものから自由に内的世界を表現することが可能で、ワークのための準備が平易であるという点にある。雑誌にある写真などを切り抜くだけで材料が整うので、参加者にとっては最初のワークとして取り組みやすいというのも利点であろう。造形的イメージワークでは、コラージュに心理療法の意味合いを持たせることはないが、コラージュに固有の、切って、構成して、貼る作業は、「一度「分断」して自己感情を断ち切る心的機能」を促し、その上で「新たな自分のイメージを再生して自己像を再統合していく」⁴⁰という体験の反復を促す。また、これらの体験の連続性及び明確な決まりが存在せず、自由度が非常に高いという点において、コラージュは遊びが持つ性格と類似している。

ファンタジーグループにおいては、遊びがあらゆる心理療法の基礎であり、遊び体験が治療や教育の基本であると考えられているが、コラージュは、既成のものを自由に使って遊ぶこととほぼ同義であると言える。既成のものを使用するという点が、コラージュの持つ安心感であり、それらをただ使用するだけではなく、切り方や貼り方を工夫することで自分だけの作品ができ上がるという、遊びの要素を含有するという点は、コラージュの持つ特徴である。

次に、コラージュとフィンガーペインティングにおい

それぞれ個人ワークと集団ワークを採用した理由は、造形的イメージワークにおいては、心理的に安全な空間での個人的な制作や表現と、他者による多様なイメージが交錯し、新たな発見や葛藤を伴う空間での集団による制作の両方を体感することを重視しているという点にある。杉浦ら（1997）は、イメージを媒介とした自他理解及び自己開発のためには、「思考過程よりも内的で主観的な感情過程を展開させること」が必要だとしている。つまり、自己のイメージを表出しつつ、他者のイメージを知るという自発的な行為により、「自我の変容と拡大」を「感覚的・体感的に経験」することが可能になると示唆している⁴¹。

芸術療法には昇華（カタルシス）的要素があり、葛藤や社会的に受け入れられない衝動などが、芸術表現の過程に現れるという⁴²。これは、フロイトが提唱した防衛機制論における「昇華」の概念と同様であり、その点において、造形表現を行いつつ、心的な動きを経験することは想定できる。しかし、ワークを経験するだけでは、行為の意味や自己の心的変容についての気付きは、言語化も、客観化もされずに終わるだろう。ワークの中で作品を完成させ、それに伴った充実感などを得るだけではなく、ワーク経験による、参加者自身の自己、他者そして子どもの心性に気付き、子ども理解へ至る過程を明らかにすることが、造形的イメージワークの機能と意義を明確にするために必要である。

6 総括と今後の課題

6-1 自他理解に繋がる造形表現

芸術の一分野として発展したコラージュは、紙面に貼るための切抜きが、作者の無意識的なイメージの表れと捉えており、特にコラージュ療法においては、イメージの集合体としての作品を受容し、共感的な理解を示すことが、治療効果の促進に繋がると示唆されている。

しかし、体験過程を詳細に追い、心的変容の変遷を分析したものは、非常に少ない。コラージュは、心理療法として作品の解釈や分析の方法も確立されつつあるが、制作者自身の体験過程を記述することで、体験ワークとしての意義と機能を明らかにすることが課題である。

フィンガーペインティングは、絵の具が持つぬるぬるとした感触が退行を引き起こしやすく、そのため、無意識がイメージとなって描画表現として表出する可能性が考えられると同時に、自身の描画表現を客観化することで、自己への気付きを促す契機ともなり得ることが示唆された。また、集団で行うことにより、コミュニケーショ

ンスキルの学習とそれによる円滑な人間関係の形成や自己肯定感の上昇に繋がること示された。

しかし、コラージュと同様に、どのような心的変容を経て最終的な描画体験に対する感想が生まれたのか、また、その過程にはどのような変容が生起しているのかということについて、詳細に分析した研究は、見当たらない。そこで、フィンガーペインティングによる心的変容の過程について分析をすることで、この表現技法が持つ特色及び参加者にもたらす働きや機能を明らかにする必要がある。

6-2 子ども理解を促す造形的イメージワーク

林（2011）によれば、集団フィンガーペインティングにおける参加者自身の体験を基に、「子どもの表現に対して、何でもかんでも「すごいね」で終わらせるのは危険なんだと感じた」と振り返る者がいた⁴³。これは、子どもの気持ちや行為の過程を理解した上で、声掛けをする必要があるという、保育者の専門性に対する気付きを表すと考えられる。さらに、絵の具が持つ独特の感触が子ども時代の泥遊びを想起させ、集団による活動が、仲間遊びを思い出させるものであることが示唆された。フィンガーペインティングは「退行的、衝動的」⁴⁴との指摘にもあるように、「子ども性」⁴⁵を誘発するものと考えられる。

また、集団で行うワークは、一人では成し得ない作品を作ることができる高揚感だけではなく、参加者相互が持つイメージの違いによるストレスも大きいことが示唆されている⁴⁶。しかし、集団カッティングは、集団コラージュや集団フィンガーペインティングと比較して、活動に対する否定的な反応が有意に少ない⁴⁷。つまり、集団カッティングは、他のワークには感じられない、特別な面白さを持つものと考えられるが、その独自性と、子ども理解を深化させる機能について検討する必要がある。

以上のことを踏まえ、今後は、保育者に対するリカレント教育としての自他理解及び子ども理解を包括し、体験的に捉えることのできるものとして、造形的イメージワークを実施する。そして、本ワークが人間理解に果たす役割を、質的及び量的双方から検討することで、造形的イメージワークが、保育者の教育と資質向上に繋がることを検証することが必要とされる。

[註]

- *1 子ども理解 本論における子ども理解とは、家庭環境などの背景、性格、発達などから総合的に子どもを理解するという意味ではなく、子どもの仲間関係において起きる様々な感情や、保育者に対する思いなどを理解するという、子どもの心性に対する理解を意味する。

★² 自動記述 理性による統制や、美学的な先入観なしに行われる、真実の思考の書き取りのことである。意識化の世界を探索するために用いられる美術技法で、絵画のみならず、様々な方法において適用される。

[文 献]

- 1 文部科学省, 2014, 「第1章総説」, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, p. 38
- 2 厚生労働省, 2014, 「第7章職員の資質向上」, 『保育所保育指針解説書』, フレーベル館, p. 200
- 3 上条晴夫, 2014, 「人気教師を目指す際に陥りがちな穴とは」, 『児童心理』, No. 985, 金子書房, p. 30
- 4 樋口和彦, 2000, 「ファンタジーグループとは」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『ファンタジーグループ入門』, 創元社, pp. 5-16
- 5 林牧子, 2009, 「イメージによるワークがもたらす個人内の変容—保育に携わる者として不可欠な感受性の会得の試み—」, 『愛知教育大学幼児教育講座幼児教育研究』, 第14号, pp. 19-26
- 6 林牧子, 2011, 「イメージワークに伴う個の心理的ダイナミクス—保育者を目指す者の豊かな感性を拓く—」, 『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』, 創刊号, pp. 11-19
- 7 林牧子, 高橋敏之, 2015, 「造形表現を中心としたイメージワークにおける参加者の心的変容と自己発見」, 『美術教育学研究』, 第47号, pp. 279-286
- 8 Laury Rappaport, 2008, *Focusing-oriented art therapy Accessing the Body's Wisdom and Creative Intelligence*, Jessica Kingsley Pub, ローリー・ラバポート (著), 2009, 「アートセラピーの鍵概念」, 池見陽・三宅麻希 (監訳), 『フォーカシング指向アートセラピー—からだの知恵と創造性が出会うとき』, 誠信書房, p. 77
- 9 入江茂, 服部令子, 近喰ふじ子, 杉浦京子, 森谷寛之, 1999, 「コラージュ療法の起源と発展」, 森谷寛之, 杉浦京子 (編), 『現代のエスプリ—コラージュ療法』, 至文堂, p. 12
- 10 中井久夫, 1993, 「コラージュ私見」, 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂, 山中康裕 (編), 『コラージュ療法入門』, 創元社, p. 141, 142, 145
- 11 中村勝治, 1999, 「コラージュ療法の独自性」, 森谷寛之, 杉浦京子 (編), 『現代のエスプリ—コラージュ療法』, 至文堂, p. 44
- 12 杉浦京子, 鈴木康明, 金丸隆太, 1997, 「集団コラージュ制作の効果—社会心理学的, 臨床心理学的考察—」, 『日本医科大学基礎科学紀要』, 第23号, pp. 1-15
- 13 徳永桂子, 1999, 「コラージュ療法における様々な工夫—連想コラージュ法」, 森谷寛之, 杉浦京子 (編), 『現代のエスプリ—コラージュ療法』, 至文堂, pp. 75-77
- 14 上西知子, 2007, 「制作過程とはどのような経験か—美術教育の可能性—」, 『美術教育学』, 28号, p. 48
- 15 山梨八重子, 2012, 「コラージュワークを組み込んだ心の教育プログラムの一考察—授業実践「へこんだ心を元気にしよう」—」, 『熊本大学教育実践研究』, 第29号, pp. 47-58
- 16 矢野キエ, 2010, 「体験過程流コラージュワークと意味の創造」, 『人間性心理学研究』, 第28巻, 第1号, p. 74
- 17 上西知子, 2013, 「制作過程と受容過程における他者性から自己理解へ—コラージュ画制作経験調査の分析から—」, 『美術教育学』, 34号, p. 75
- 18 岡田敦, 2006, 「表現療法技法としてのフィンガーペインティング—精神科臨床における適応とその実際—」, 『椋山女学園大学研究論集』, 第37号 (人文科学篇), p. 68
- 19 Ruth Faison Shaw, 1934, *Finger Painting*, Boston, Little Brown and Company, ルース・フェゾン・ショウ (著), 深田尚彦 (訳), 1982, 「指は筆より前からあった」, 『フィンガーペインティング—子どもの自己表現のための完璧な技法』, 黎明書房, p. 26
- 20 石井哲夫, 藤原貞子, 1961, 「フィンガー・ペインティングのなかの人間関係:クレヨン画法との比較による」, 『日本保育学会研究発表特集』, p. 16, 18
- 21 中井久夫, 1985, 「芸術療法の有益性と要注意点」, 『中井久夫著作集《精神医学の経験》2 治療』, 岩崎学術出版社, p. 167
- 22 岡田敦, 2006, 「表現療法技法としてのフィンガーペインティング—精神科臨床における適応とその実際—」, 『椋山女学園大学研究論集』, 第37号 (人文科学篇), p. 67
- 23 林牧子, 2009, 「イメージによるワークがもたらす個人内の変容—保育に携わる者として不可欠な感受性の会得の試み—」, 『愛知教育大学幼児教育講座幼児教育研究』, 第14号, pp. 19-26
- 24 河合隼雄, 1995, 「物語と科学」, 『河合隼雄著作集』, 岩波書店, p. 114, 116, 202, 217, 310
- 25 岡本直子, 2005, 「パーソナリティ傾向と表現体験との関連性についての研究」, 『沖縄国際大学人間福祉研究』, 第3巻, 第1号, pp. 55-70
- 26 星野良一, 2006, 『補完・代替医療—芸術療法』, 金芳堂, p. 1, 2
- 27 Laury Rappaport, 2008, *Focusing-oriented art therapy Accessing the Body's Wisdom and Creative Intelligence*, Jessica Kingsley Pub, ローリー・ラバポート (著), 2009, 「アートセラピーの鍵概念」, 池見陽, 三宅麻希 (監訳), 『フォーカシング指向アートセラピー—からだの知恵と創造性が出会うとき』, 誠信書房, p. 77
- 28 日高なごさ, 2012, 「学校内適応指導教室における共同芸術療法の試み」, 『大阪産業大学人間環境論集』, 12, pp. 95-110
- 29 岡田康伸, 2007, 「ファンタジーグループの実際のやり方と解説」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『現代のエスプリ別冊—イメージによるグループワークの実際』, 至文堂, p. 85
- 30 岡田康伸, 2000, 「ファンタジーグループの構造」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『ファンタジーグループ入門』, 創元社, p. 35, 36
- 31 日高正宏, 2000, 「ファンタジーグループの技法と意味」, 『平安女学院大学紀要』, 31, p. 8
- 32 岡田康伸, 2007, 「ファンタジーグループの実際のやり方と解説」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『現代のエスプリ別冊—イメージによるグループワークの実際』, 至文堂, p. 93
- 33 林牧子, 2009, 「イメージによるワークがもたらす個人内の変容—保育に携わる者として不可欠な感受性の会得の試み—」, 『愛知教育大学幼児教育講座幼児教育研究』, 第14号, pp. 19-26
- 34 秋葉良子, 2007, 「各技法から—粘土2」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『現代のエスプリ別冊—イメージによるグループワークの実際』, 至文堂, p. 152
- 35 Adolf G. Woltmann, 1950, "Mud and Clay, Their Functions as *Developmental Aids and as Media of Projection*", Mary R. Haworth (Editor), *Child Psychology: Practice and Theory*, New York, Basic Books, Inc. アドルフ・G・ウォルトマン (著), 1969, 「泥と粘土, 発達の促進及び投影の媒体としての機能」, メアリー・R・ホワース (編), 外林大作 (訳), 『児童の心理療法—実践と理論的基礎II』, 誠信書房, pp. 525-545
- 36 藤崎義宣, 2007, 「各技法から—粘土1」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『現代のエスプリ別冊—イメージによるグループワークの実際』, 至文堂, p. 149
- 37 藤崎義宣, 2000, 「終わりの儀式」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『ファンタジーグループ入門』, 創元社, p. 79
- 38 樋口和彦, 1986, 「宗教的イメージ技法としてのファンタジー・グループ」, 『基督教研究』, 第48巻, 1号, pp. 1-19
- 39 守屋英子, 2007, 「ファンタジーグループに関する研究—グループフィンガーペインティングで体験されることへの客観的研究の試み」, 樋口和彦, 岡田康伸 (編), 『現代のエスプリ別冊—イメージによるグループワークの実際』, 至文堂, pp. 114-127
- 40 中村勝治, 1999, 「コラージュ療法の独自性」, 森谷寛之, 杉浦京子 (編), 『現代のエスプリ—コラージュ療法』, 至文堂, p. 50
- 41 杉浦京子, 鈴木康明, 金丸隆太, 1997, 「集団コラージュ制作の効

- 果—社会心理学的, 臨床心理学的考察—, 『日本医科大学基礎科学紀要』, 第23号, p. 14
- 42 Laury Rappaport, 2008, *Focusing-oriented art therapy Accessing the Body's Wisdom and Creative Intelligence*, Jessica Kingsley Pub, ローリー・ラバポート(著), 2009, 「専門職としてのアートセラピー」, 池見陽, 三宅麻希(監訳), 『フォーカシング指向アートセラピー からだの知恵と創造性が出会うとき』, 誠信書房, p. 75
- 43 林牧子, 2011, 「イメージワークに伴う個の心理的ダイナミクス—保育者を目指す者の豊かな感性を拓く—」, 『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』, 創刊号, p. 18
- 44 中井久夫, 1985, 「芸術療法の有益性と要注意点」, 『中井久夫著作集《精神医学の経験》2 治療』, 岩崎学術出版社, p. 167
- 45 Peter Hollindale, 1997, *Signs of Childness in Children's Books*, The Thimble Press, ピーター・ホリンデイル(著), 2002, 「批評用語「子ども性」の提唱」, 猪熊葉子(監訳), 『子どもと大人が出会う場所一本のなかの「子ども性」を探る』, 柏書房, p. 91
- 46 林牧子, 2009, 「イメージによるワークがもたらす個人内の変容—保育に携わる者として不可欠な感受性の会得の試み—」, 『愛知教育大学幼児教育講座幼児教育研究』, 第14号, pp. 19-26
- 47 林牧子, 2011, 「イメージワークに伴う個の心理的ダイナミクス—保育者を目指す者の豊かな感性を拓く—」, 『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』, 創刊号, pp. 11-19